

第26期 国立市社会教育委員の会（第10回定例会）会議要旨

令和8年2月25日（水）

[参加者] 内田、寺澤、堀、荒井、横山、根岸、田代、大森、松塚、生島

[事務局] 井田、楠本、関

生島議長 それでは、第26期国立市社会教育委員の会第10回定例会を開会いたします。

本日は御欠席の連絡はいただいております。もうじき到着されるかと思えます。いずれにしても定足数には達していますので、本日の会議を始めたいと思います。

それでは、まず本日の配付資料につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

事務局 事務局です。

資料の説明をさせていただきます。まず、皆様から見て左側の山ですが、こちら、まず次第が1枚目、そして次に2枚目が資料1としまして、「これまでの振り返り」となっております。続けて、右側の山ですが、こちら、まず第26期の第9回議事録、次に公民館だより、そして図書室月報、「いんふおめーしょん」となっております。

説明は以上です。

生島議長 ありがとうございます。

それでは、次第2の今後の進め方について入っていきたいと思います。前回、堀委員と横山委員を中心にしながら、シルバー学習室と子育て短歌入門講座のヒアリング報告をしてきました。皆さん方と一緒にヒアリングしてきた内容を共有してきたということです。その結果ですけれども、学習内容そのものではなくて、仲間づくりであるとか、または居心地のよさからサークル活動や自主グループ活動へ展開していくという感じが、仲間づくりとなると世代をある程度限定しながら、同じ年代、同じ境遇だからこそ、安心できる居場所をつくり出せたというようなことも見えてきたかなというふうに思います。

それで、そうはいつでも、ここの中ではまだ知見として足りないものもあるんじゃないかというようなことで、この会議のもう一つの課題であった中間評価をする際に、どんな事業がされているかということを見ていく中で、実はここの中にももっと我々がすくっていくヒアリング対象が出てくるんじゃないのか、改めてもう1回、ここの中間評価の柱というのを見てみようじゃないかということで、皆さん方に御検討いただいていたというのが今日までのところだと思います。

それで、こちらは、これまでどんな観点が出てきたのかということのを少し改めて整理してみようということで、もし議論の呼び水になればということで私のほうで作らせていただいた資料が、資料1の「これまでの振り返り」というA4、1枚のものになっています。どんなことをやってきて、そして、例えば答申というのを見据えたときにどんなふうにまとめていくことができるかなというようなことを考えて、ちょっとこういうふうなことでまとめてみました。

どんなものを対象にしながら、私たちがどういうものを見て議論しているのかということで、ライフステージに応じた学習機会の例として、例えばシルバー学習室、高齢世代を対象にした学習室のシルバー学習室、それから、子育て短歌入門講座は子育て世代ですね、というのを見てきた。今日、この後

の議論の中で、ほかにヒアリングを行うとするとどういうものが出てくるかというようなところでもあります。

それから、2番目ですけれども、例えば今まで見てきたこの1、2という2つの講座、またグループ、その中でどういうものが見えてきたのかというのを少し箇条書にしてきたんですけれども、例えば1つ目に、同じ世代や同じ課題など、閉鎖的だからこそ居心地がよくなっている、対象が絞られている事業になっているであるとか、それから2番目ですけれども、関係を育てていくということ。次の関係を育て自主活動に発展させていっているというふうなところ。こうしたものが学習機会として求められている声が聞こえてきたという。さらに、3番目ですけれども、自身の生活や経験を見詰め直し、個人が持つ世界を表現することができる場となっている。または、4番目に、経験を共有し、共感、対話する機会が求められている。こういったことが、これまでの2つの講座で見えてきたんじゃないかというふうなところなんです。もちろんいろいろ肉づけをしていくと、それがほかにも、この内容が関わってくるわけですから、大体こういうふうなことが見えてきたかなというふうに思います。

3番目ですけれども、こういうふうな実態から見えてきた中で、さらにこういったものを充実化させていくことに対して期待されることってどういうふうなことなのか、2を実現するためにどんなことが求められるかといったときに、例えば共通のライフステージの人々が関係性をつくれる連続講座であるとか、単発の講座というのではなくて、仲間づくりができるためには、関係性をつくるためには連続講座ということが求められてくるものになる。さらには、そういったところからサークル化を促進していくような動きというのが必要なんじゃないかという。または、そもそもそういう場に出てくる参加のきっかけづくりというのが求められるだろう。それから、そういった魅力的な企画の構成力であるとか、そこに携わる職員、そういった人たちの存在というのが期待されるだろう。こういうふうなところというのが、これまでの2つの事業の中からは見えてきているんじゃないというふうには思いました。

そうなったときに、これだけではない、さらに視点を広げていくとするとどうするのか、どんなことがあり得そうか、またはどういうものを対象にしながら見ていくことができるかということで、今日、皆さん方に持ってきていただいた素材を集めていきながら、また検討をしていきたいというふうに思っております。この振り返りについても様々御意見あるかと思っておりますので、これは一つの私なりのまとめだということで御提案させていただきたいと思っておりますけれども、そのことも含めて御意見いただければと思います。まずは、ちょっとこういうふうなことを提示をしながら、皆さん方、この進捗状況、推進計画の進捗状況について見たりしながら、今後の動きについてお考えいただいたこととお話しいただければというふうに思います。

今日の決着点としては、着陸点としては、次にどうやって動くかというところが見えてくるといいかなというふうに思っています。どこからでも結構ですけれども、いかがでしょうか。ぜひお考えいただいてきたこと、持ち寄っていただいたこととお話しいただければと思います。

堀委員、お願いいたします。

堀委員 振り返りとしてまとめていただいたことは非常に的確だと思います。私たちは現にこんなヒアリングをしてきて、そこからはこういうことが見えてきた。ただ、2番目で書かれたことは、ヒアリングした事例としてはそのとおりなのですが、だからこそ、この会議の課題との関連で言うと、それだけでいいのかなという気がします。

今後どうするかは分かりませんが、ヒアリング先を選んで広げていけば、も

う少し違う話も出てくるかなと思います。

生涯教育には、知識、技術の習得を目指す講座も多いと思いますが、そんな側面が強い講座の参加者へのヒアリングがまだ欠けているというか。結果的には、聞いた活動は割合に仲間づくりが主目的になっていたという感じがして。しかし生涯学習の範囲で市が主催する講座だって、生きがいや仲間づくりを主目的にしているものばかりではないだろう。

漠然とした言い方ですが、追加して、何らかの知識、技術の修得自体を主目的にした講座の受講者が、そこに参加して学んで、どういうことを感じているかをヒアリングしたほうがいいんじゃないか。そうしたほうが会議の検討のための、話の広がりが出てくるのではないか。

生島議長 ありがとうございます。

もしちょっと、もう少しかみ砕いていただければと思ったんですけど、そこで言う例えば知識、技術というのがどういうものを、結構いろんなものがあり得ると思うんですけど。

堀委員 具体的な選択の前に、ヒアリングして見えてきたもの、足りないことが見えてきたものというレベルで話しました。

どんなヒアリング先を選ぶかでは、取材しやすさを別にして、いろいろあるでしょう。スポーツや体を動かすこと、料理教室、パソコン教室、社会問題や地域の問題を学ぶ講座もあるでしょう。あるいは仕事のためのリスキングみたいなこともある。集団学習する中で、互いが支え合ったり学び合ったりする場面や成果が期待できるにしても、そもそもは知識や技能を学ぶために講座がある、そのために入るとい活動が多いのではないか。

生島議長 すみません、よく分かります。だとすると、例えばどういうものが対象になるかというのをぜひちょっと、今日はそういう議論だったので、どこに、こういうものがあるんじゃないかなというような。

堀委員 可能性としては、すごく幅が広いですね。

生島議長 ここにもそういった振り返りとかも出ているので、だから、そういうのを見ると、こういったところが、グループ活動がいいんじゃないかというふうに見ていくと、少し具体的になるかなというふうに思いました。

御意見としてはとてもありがたい御意見ですし、一つの考え方としてあるかと思えます。ちょっとそういう意味でも、堀委員、少し。

堀委員 いや、だけど、すごく、そういう言い方しちゃうと、やっぱりそういうことに発展しちゃうと結構いろんなことがあるから、どっちに突っ込んだらいいのかなというのはちょっとあるような気がしまして、そこはちょっと皆さんで。

生島議長 少し皆さんもそういう一つお考えいただく観点としてあれだと思いますが。

今に関連してでもいいですし。内田委員、お願いいたします。

内田委員 ありがとうございます。

堀委員のおっしゃっていることは僕もそうだなと思います。要はこれまでは仲間づくりだけみたいなのとか、そこでの関わり合いが深まることが割と期待されるようなことにも、言い方は違うかもしれないけど、成果として見られ

ると考えます。要は生島議長がおまとめいただいた内容がそんな感じになっているかと思うんですね。一方で、ライフステージに応じた学習機会の充実って考えると、一回一回が楽しければ割といい、割とよかったなとか、またこういうのがあれば行きたいなとかというふうに思ったりすることが結構あるんじゃないかなというふうに思うんですね。

例えばここに、横山委員のいらっしゃるスポーツ協会のスポーツイベントなどはまさにそういったような側面があって、この評価表を見ると大体スポーツ大会やスポーツ教室や入門教室などは、比較的人も集まっていますし、割と多くの世代が集まっています。そこで、そういったスポーツのイベントとかの充実というのも一つの視点になると思うためそういったスポーツのイベントに参加した人に直接聞いたりとか、あるいは、もし可能であればアンケートに協力できる方にアンケートを取って、そういった意見を集約したりすると、スポーツイベントとかスポーツの内容の充実がやっぱり重要だとか、そうでないとか、いろいろそういうことが分かってくると思います。

同じような内容としては、今、F S Xホールの、芸小ホールが主催する、いわゆる文化芸術的な内容で音楽のイベントがあったりだとか、演劇があったりだとか、様々なイベントをすごく楽しみに参加されている方も大勢いて、やっぱりそういう評価を見ると、すごく回数も多いですし、参加されている人も多くて、そういった文化芸術に関する内容がたくさんあって充実したりすると、多分、学習機会の充実というかな、国立市の学ぶ機会ですとか内容が豊かでないなというふうに思う市民の方が多んじゃないのかなと思います。そこで、その辺りも、そういったイベントとかに参加された方に聞いたりすることで、そちらの傾向、どちらかと言えば、単発単発で来て、今日は楽しかったな、また何かそういうのがあれば行こうかなと思うのではないかと考えます。それは、学びにもなるし、そういった技能を向上したりだとか、知識を向上したりすることもあって、そういった意味では学習機会の充実というところにつながってくるんじゃないのかなと思います。

だから、次の視点としては、そういったイベントですとか、そういったところで参加している方の意識をはかる方法が何か見つければ、実態をつかんでいく一つの方法かなと思います。頂いた資料を見させていただいたところです。

生島議長 ありがとうございます。

横山委員 じゃあ、私も。

生島議長 横山委員、お願いいたします。

横山委員 私も内田委員と同じような考え方をこれを見て思ってしまって、やっていることはいいけど、こういうことに参加しない人たちが何を求めているのかな、どういうことがあったらやってみたいと思っているのかなというのを知ること面白くないかなと思っていて、さっきおっしゃったみたいに、イベントで、例えば私、スポーツ協会の関係で、ファミリーフェスティバルとかウォーキングというイベントを担当しているんですけど、そのときに、全くそういうことにふだん触れてない方々が一齐に集まって、子供のために来る、親が来る、その親に例えばそういうアンケートをやったときにどういう回答が来るのかなってちょっと試してみたりとか。だけど、やってない人たち、今、こういうことに関わっていない人たちがどういうことだったら参加してみたいかなとか、どういうことだったら興味が、どういうことに興味があるのかなって知るのがこのテーマに合っているのかなということもちょっと思ったんですね。

ど、確かにスポーツ面に関しては、私のほうでも、そういうヒアリングとかであればできると思うんですが、もしヒアリングするようであればですけど。以上です。すみません。

生島議長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。根岸委員、お願いします。

根岸委員 今回のヒアリングしたシルバー学習室、子育て短歌入門、これ、やはりもう皆さん言っているように仲間づくりをすることというのがありますが、でも、仲間づくりをすることだけじゃなくて、その先にちゃんと生涯学習につながっていくわけですよ。今までなかなかそういう生涯学習に入れなかった人が、そういう仲間づくりをすることによってみんなで生涯学習をしますよということで、とても生涯学習を推進するためのすごくいいやり方なんだろうなという気がしました。

あと、この推進計画を見たときに、20ページのところにまず課題がございますよね。この課題のところには、小学生、中学生、高校生、あと成人という書き方をしていますけど、あと高齢者、あとしょうがいしゃ、この4つに分けて課題が書かれているんですが、30ページのところで、基本計画というところになると、成人というのが出ているんですよ。子供とか、あと高齢者、しょうがいしゃについての、多分、そういう事業がここにあるんだと思うんですけど、成人というところではあまりないのかなと。先ほど言ったそういう仲間づくりをすることでそういう生涯学習に結びつくと、そういうやり方を、例えば成人と言われている世代にどうやったら持っていけるといいのかなというのを考えるのもいいのかなと思いました。

成人というのがどの範囲になるのか、よく分からない。

生島議長 そうですね。意味だけ見れば、まさに子育て世代なんかは成人ですよ。で、ライフステージに即してというふうなことであるかなというふうには思いますけど。

根岸委員 子育て世代については、矢川プラスとかあの辺でも結構いろんな事業があるので、前も私、言ったと思うんですけど、かなり充実しているんじゃないかなと思います。だから、それ以外の成人と言われているところなんですかね。

生島議長 ちょっと私が、今、悩ましいなと思っているのは、今、お出しいただいた様々な例えばイベントとかは本当にやぶさかではないと思うんですけど、今回の諮問の内容というのが、単に学習機会の充実ということではなくて、ライフステージにおける、に応じた学習機会の充実というふうなことを考えていくと、その切り口でどういうふうに考えればいいかなというのは、ちょっと皆さんにぜひ御意見いただきたいところです。

今、例えば根岸委員が御指摘くださった生涯学習振興計画で言うならば、具体的に挙がっている子ども・若者とか、それから成人、あと高齢者、しょうがいしゃ、そういう具体的なライフステージというふうに挙がっていたり、またはしょうがいしゃであると、学校教育段階だけではなくて、その後のしょうがいしゃの学ぶ機会ということで、かなり広くライフステージのことを捉えられているかと思うんですけども、そういうふうの中で、例えば今まで我々が見てきているのは、例えば成人であると子育て世代とか、高齢者の部分というのは見てきている。じゃ、ほかはどうなんだろうという視点というのは持ち得るのかなというふうには思ったりもしましたが、イベントとかというふうなこと

で考えると、どういうふうにライフステージというのをかませっていくことができそうかなというのは、ちょっと御意見というか、加えていただければいいなというふうに思いました。

内田委員。

内田委員　そういう意味では、イベントに参加している、イベントの内容にもよるとは思うんですけども、割と、先ほども横山委員がおっしゃったように、スポーツのイベントだと保護者の方が一緒に連れてきたりするので、そうすると先ほど言った成人の世代はそこでカバーできたりもしますし、あと、参加、例えば子供主体だったら子供にも聞いたりできます。

一方で、イベントの内容にもよりますが、大人がやるスポーツのイベントであれば子供とかは参加しおらず、それこそ本当に成人をターゲットにすることが可能だと考えます。大人対大人で楽しむようなものですから、一つその世代が集まって、逆に言うと子供とか高齢者はいなくて、その世代がある程度ターゲットで来ていただけているんじゃないかなと。

同様に、スポーツ以外にも、文化芸術についても、子供と楽しむ〇〇とかというようなことであれば、例えば子供と楽しむ音楽とか、子供と楽しむオペラとかっていうふうにいったら子供と保護者の世代になると思いますし、シンプルに落語を楽しもうとか、あるいは演劇を楽しもうといったら、多分、あまり子供は来ないと思うんですよね。演劇だとか、クラシック音楽だとかある程度、イベントの内容によって集まる世代とかというのは見えてくるんだろうなという気がします。ただ、ある程度そういうイベントの内容と照らし合わせていけば、ターゲットは絞ってこれるんじゃないかなという気がして、それが生島委員長がおっしゃっているような、ライフステージに応じたというところにも対応し得るのかなというふうには思います。

生島議長　ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

あとはちょっと対象として聞ける人たちと聞けない人たちというか、アンケートを作るというのも非常に大変なことなので、そういう意味ではどこまで実現可能なのか、または聞く対象をどうするかとかということは検討があり得るかなと思いますけれども、例えば今の内田委員からお話があったもので考えると、6ページ、ちょっとこれも実際のところ、どうかが分からないんですけども、6ページにあるような文言、その観劇会事業とか、こういうようなものを見てみたりなんかすると、恐らくこういうのというのは、子供たちにいきなりアンケートをとるよりは、既に成果とか評価が出ているものなので、その評価を出していくプロセスに、職員の方が見えていたりだとかすると、職員の方からお話を聞けるかなというふうには思って伺っておりました。

ありがとうございます。

ほかにも皆さん、何かお気づきの点とか御意見ありましたらお伺いしたいと思います。

田代委員、お願いします。

田代委員　行政の役割というところでいくと、要は諮問しているのが市役所なので、市がやるべきこと、都がやるべきこととか、国がやるべきことというのは分かれていると思うんですけど、市がやるというと、何となく仲間づくりとか、一番住民の近いところで考えているのかなみたいなので、大体、見てみると、みんな、何となく仲間に近づいて、本来、知識とか、本来の技能、自分が必要だという技能を学習機会の中で習得しているみたいなものはあまりないのかな

みたいな感じなので、要は市からの諮問に対して市に答えるというところできくと結構絞られちゃうのかなというところで、どうもどんなことを言ったらいいのかというのがちょっとよく分からないところですね。

例えば知識でいくと、一番最初のところにあった戦争の關係のいろんなイベントがあったりとか、当時は「火垂るの墓」ですとか、ああいう映画も久しぶりにやるんだよみたいなので話題になっていたんですけど、そういう仲間づくりでもないし、その知識がどうやって生かされるかもよく分からない中で、みんな、そういうことで集まってもらって、いろいろお話を聞いたりとか、みんな議論したりとかするということは、それは学習機会の、ここで言っている学習機会の充実の中に含まれるような、含まれないような、それがその人にとってどういう意味があるのかみたいなのがよく分からないので、ちょっと今の段階でいろいろ議論を聞いても、どういうものが対象になるのかなというのがよく分からない。

生島議長 知識、技術というふうなこと。

ありがとうございます。大事なポイントかなと思います。知識、技術って人によって全然違うわけですし、そういう中で行政側、要するに社会教育として公的に行っているときの市民にぜひ、こういうことを考えていくとか、市民の側から、異なる立場の人たちや世代の人たちと考えたいというような、そういうやっぱり知識であったり考えというのを共有する場という、それは一体何なんだろうというふうな、田代委員の。

田代委員 それを楽しいから受けようってなかなか思わないところで、本当にそういうものを必要としている人がいるのかとか、募集してもなかなか集まらないんじゃないか、ちょっとその辺が、要は本当に学習機会の充実に結びつくのかなみたいなことと、どういうものが対象になるのかがよく分からない。

生島議長 ありがとうございます。

一通り皆さん方から御意見いただければと思いますがいかがでしょうか。

寺澤委員、お願いいたします。

寺澤委員 多分、単発なのか、連続講座なのかというのは割と違いがあると思っています。連続講座になると、やっぱりある程度人間關係が主目的とまでは言わないですけど、それが無い方はだんだん参加しづらくなっていく、だから続かないというものもあるんじゃないかと思うんです。短歌の講座のアンケートとかを見ていても、目的は短歌です、短歌じゃなかったら参加しませんでしたという言葉も何人かおっしゃっていたかと思うんですけど、それでもそこで人間關係を築いていく。だから、人間關係がある程度できてきたら自然發生的に進んでいくようなよい流れができるところがあるのかな。

ただ、単発の講座だと、やっぱりそういう人間關係を構築するということまでいかないの、ある種一定の知識を習得するためのプログラムになってしまうのかなというのがある。先ほど田代委員が言われた、市でやるべきことで、何を目的にするのか、そうだなというふうに思いました。市でやるんだったら、ある程度の知識と技能もそうですけど、人間關係ができて、地域の中で何かあったとき地盤というか、そういうのがつくれるようなもので、お互いに支え合っていけるとか、お互いを気にしていける。あの方、しばらくいらっしやらないよね、どうしているんですかみたいな会話が普通にできるようなのが大事なのかなと思いました。

ただ、連続講座というのと、どうしてもハードルが上がっちゃうようなんです

よね。だから、その入り口には単発の講座というのがすごく有効なんだろうなと。その単発の講座ですごく面白かったから、じゃあ、あと二、三回行ってみたい、もうちょっと行ってみたいと思えるような何か工夫があると、それこそ無理なく自然につながっていくのかなと思いました。

生島議長 ありがとうございます。非常に整理をしていただいております。ありがとうございます。

大事なポイントとして、やっぱり主として事業を期待して行ったときに、地域の中で生活の基盤ができるような、そういう関係性をつくれるということがやっぱり生涯学習というところに、もしかして提供しているときに求められているんじゃないか。そういう意味では、今、ここで連続、仲間づくりということが講座のポイントにあるんじゃないかという部分、御指摘は非常に的確かなというふうに思いましたし、だからこそ、多分、今まで連続講座のほうに注目がいつているということかなと思います。そうなってくると、単発講座というのをどう位置づけるかというふうな、または単発講座でどういうものを取り扱っていくかということの視点につながっていくのかなと思います。

内田委員、お願いいたします。

内田委員 先ほどの田代委員のお話の中にも、国がやること、都がやること、市がやることというお話があって、どっちかという、国とか東京都のほうは、様々なことをやっていますが、例えば学び直すとかリスキリング、資格を取り直したりとか、そういったような関連のことが国とか東京都とかは比較的幾つかあるのかなというふうに思っていました。

そういった視点で今回の資料を見てみると、11ページのくにたち緑のサポーター養成塾のところ、ベーシックコースとアドバンスコースがあって、アドバンスコースは結構深い、樹木診断だとか、概観診断だとか、そういったようなことが学べたり、さらに13ページの図書館ボランティア育成事業とかなんかで見ると、点訳ボランティアですとか、そういったような専門性のある音楽ですとか、そういったようなことが学べる機会も、幾つか市としてもそういった機会を設けてはいる、というように見えます。

ただ、たまたまなのかもしれないですけど、ここに載っている数が非常に少なく、ニーズがないから少ないのか、あるいは少ないからあまり人が、市に期待してないからそういうのをやっていないのかというのはちょっと分からないですけども、そういった、シンプルに楽しみで、イベントを楽しみにしているとかというような参加とか、あるいは今回、ヒアリングであったようなシルバー学習室ですとか短歌入門講座みたいな感じではない、そういった学び直したりとか、資格を取ったりだとか、そういったところを生涯学習、ライフステージに応じた学習機会では入ってくると思うんですけど、それは市の中では少ないなというのは感じました。

これは資料として少ないとか、本当に少ないのかがちょっと、もし事務局のほうで、補足でこうですよということを言っただけならば少し整理ができるのかなとは思っています。そうすると、圧倒的に少ないということであれば、充実するという意味では、ここのところを少し多くしていけば、今後、機会としては充実するんだろうなという気はします。

生島議長 少ないというのは、事業数が少ない。

内田委員 ここで出ている事業、学び直したとか、資格を取ったりだとかという内容が非常に少ないですね、ここに載っている中では。ほかの単発にイベントに参

加して楽しいなとか、講座に参加して仲間ができてよかったなというのは結構いっぱい載っているんですけど、そういった学び直せるとか、資格が取れるだとか、専門性をさらに深めて次に生かせるとかといったものは非常に少ないと思います。

だから、それはこの資料だから少ないけれども本当はいっぱいあるんですよということであれば、少ないから充実してないということにはならないと思います。その辺り、市の実態が分からないので、判断ができると考えます。

生島議長 ありがとうございます。

事務局のほうからここ、ありますでしょうか。

事務局 すみません、事務局です。

分からない部分も多いんですけども、いわゆる資格につながるような講座は、民間の企業さんがやられていたりしますし、資格取るために市が1回、2回単発で講座をするものではなく、本当に長期間とか、多い回数通うものになりますので、民間の事業者さんがやられているようなものにはそういう意味でやってない部分が多いです。市がやっているものとしては少ないのかなと。すみません、ちょっと分からないながらの回答になっちゃうんですけども。

田代委員 今の話でいくと、東京等に職業技術専門学校というのがあって、昔は立川にもあったんですが、今は集約されて八王子にあるんですけど、そこでやっぱり資格というか、働くためのいろんな技術とか資格を取ったというのはありまして、昔、やっぱりシルバー人材センターに植木の手入れを頼んだら、あそこで勉強しましたみたいな人が結構いたんで、やっぱり技術とか知識の習得というのは、どっちかというとう東京都辺りのほうが多くやっているのかなみたいなのはあります。だから、市のほうが少ない。

内田委員 だから、それはそれでいいんですけど、民業を圧迫しちゃいけないとか、そもそも市の所掌じゃないということであればそこは視点から外すというだけの話なので。答申に向けた視点からは、そういった学びの一つができるのかという視点は一度外して、それ以外の視点の中でやっていくということであれば整理ができると思います。

けれども、やはりそれも含めて考えていきたいと思いますということであれば、整理していく必要はあると考えます。

生島議長 大森委員、お願いいたします。

大森委員 大森です。

まだちょっと議論の半ばだと思うんですけども、ちょっとここまでの感想を1点だけいいでしょうか。今、内田委員のほうから実態をつかむという言葉もありましたけども、今日の資料1の中にアスタリスクマークですかね、米印ですかね、「他にヒアリングを行うか」ということを提案した辺りなんですけども、ここまでの議論ですと、そのことについて、いや、もういいんじゃないかという意見はなかったように思うんです。やっぱり実態をつかむということと言うと、やっぱりヒアリングは有効なのかな。

そうすると、ここまでの議論の中でもヒアリングを行うとしたら、どういうふうにやっていくのかということについても幾つか手がかりが出てきているという印象を持ちました。例えばですけども、根岸委員のほうから、やっぱりライフステージが主題ですから、若者も対象とした事業が市の中でしっかり

位置づけられていますから、若者を対象とした事業にやっぱりヒアリングをしていくというのがあるべき姿なのかなというのがある。

それから、あと、参加者を、新規の参加者をどうやって得ていくかということについては、まとめるような形で寺澤委員からいただきましたけども、連続講座の入り口になった単発の講座がもしあれば、それは事業を絞り込まなくても、ぜひ聞いてみると、学習機会を広げる、ライフステージに応じた学習機会を広げていくことにも参考になるので、具体的な提案までできないんですけども、連続講座のよい入り口になった単発の講座があったかどうか、あったとすればぜひヒアリングをしてみたいなというふうに思いました。

すみません、ちょっとしっかりと出ているページはないんですけども、私のほうでもちょっとこういうヒアリングがあったらいいのかなというところが一つございまして、特定世代を対象とした事業ではないけれども、結果的に幾つかの世代の学習の機会を十分に保障した、そういうふうなものもあれば、具体的な提案できないんですけども、ぜひちょっとヒアリングをしてみたいなというふうに。

先回か先々回か、くにたち公民館だよりの中で包括的性教育の講座があったんです。ちょっと私、内容は分からないんですけども、そうしたものがそういったものになっているのかなというのをちょっと推測します。この推測の根拠なんですけども、別の自治体ですが、国分寺のところで、やはり包括的性教育を主題とした事業をやると、やっぱりテーマが、テーマの性質上、一番の中心的な参加者というのは子育て世代の方なんですよね。自分の子供にどうやって性教育をやるかというのは切実な問題ですが、実際、蓋を開けてみるとそういった方たちが多いんですけども、世代特定の事業ではないので、様々な方が参加をされていて、例えばいわゆるシルバー世代ですけど、孫たちの性教育どうしたらいいんだろうということの疑問を持っていらして、結果的にその世代が交ざり合うことで、それぞれの世代の課題が勉強しづらくなるんじゃないかと、多様な世代から議論が出て、それぞれの世代に応じて学習になっているところがあるようです。きっと国立にもそうした事業があると思うので、そうしたもののヒアリングもちょっとできたらいいなというふうにちょっと思いました。

生島議長 ありがとうございます。整理をしていただいてありがとうございます。

いかがでしょうか。まだ御意見いただいていない方々。

荒井委員はいかがでしょうか。

荒井委員 はっきり言えないんですけど、「これまでの振り返り」でまとめてくださった2のところ、「表現する」「共有し」という言葉があります。「進捗状況表」の12ページに、「学習の成果を活かせる場の形成」というところがあって、そういうものが、今、大森委員がおっしゃったような、特定の世代ではないけど、結果的に特定の世代に有効だったというもの、充実につながるようなものが、多分、あるんじゃないか。図書館でやっているボランティア養成とか、サポーターとか、そういうのは全ての世代に、多分、投げかけていると思います。時間ができたのでとか、子育てに役立ちそうとか、いろんな世代が来ているけど、そこをヒアリングしてみると何かあるんじゃないかなという気がします。

以前、寺澤委員がおっしゃっていたと思うんですけど、あるところに行ってみたら、これは子供は参加できないことだったとか。そういうのもあるけれども、逆に、ボツチャっていうんですか、あれが初めはしょうがいしゃだけだったと思うんですけど、市報か何かを見ていたら、どなたでもって、誰でも参加できる事業になっていて、いつから変わったのかなとか思ったりしたんですけど

ど、主催者側はなぜ変えたんだろうとか、調べてみたら。

生島議長 ありがとうございます。
寺澤委員、いいですか。

寺澤委員 ボッチャの大会、この間、行ったんですけど小学生のグループとか、しょうがいしゃの方、あと高齢者等々いろんな方がいて、楽しく、対戦しました。

事務局 ちょっとボッチャについて補足させていただければ。

ボッチャは、パラリンピックの競技なので、オリンピックにはなくてパラリンピックの競技になりますので、そういう意味では、パラリンピックはしょうがいのある方のオリンピックになりますので、パラリンピックに出るためには、いわゆるパラリンピックに、体にしょうがいがあったりというところの競技にはなるんですけども、ただ、市でやっているものについては、そういったパラリンピック競技であるボッチャというところは意識しつつも、しょうがいしゃの方も健常者の方も一緒に勝負ができるスポーツというところで体験教室というのを月1回やっています、それはしょうがいしゃの方ももちろんですし、健常者の方も来ていただいて、ぜひ体験してみてくださいと。

あと、それと先ほど寺澤委員おっしゃられた、年に1回ボッチャくにたちカップという大会をやりまして、練習に参加した成果も発揮できるような場も用意しているというものになっています。

生島議長 ありがとうございます。

アダプテッド・スポーツという言い方もあって、しょうがいがある人だけというんじゃないくて、それを一緒にやれるということにつながってくるかなと思います。それは、多分、国立市の様々な部分にも、そこを動けないというふうなのは施策の中にも反映されているかと思いますが、例えば、今日、見ていただいた計画の中の3ページにあるしょうがいしゃ青年教室、これ、国立では非常に重要な事業ですけれども、これはしょうがいしゃの人たちのために事業ではなくて、しょうがいがある人とない人が共に活動してお互いに学び合うという設計になっておりますので、そういった意味では様々なところで、事業に反映されているかなと、今の話はつながっていくんだと思います。

すみません、ただ、入り口としてというところとか、または、今、先ほどお話がありました学習成果を生かしながら、多様な世代を、特定の世代を対象にしたわけではないけれども、結果的に多様な世代の人たち、または特定の世代に有効になったというような意味での図書館ボランティアとか、学習成果を生かしながらまた活動につなげていくというので、そこを、今、荒井委員から御提案いただいたというふうに思います。

ほかにはいかがでしょうか。松塚委員、いかがでしょうか。

松塚委員 様々な切り口というか、枠組みがあると思うんですけども、例えばイベントで見れば、スポーツであったり、文化芸術であったり、ボランティアであったり。その中にも、知識や技能を養成していく活動がある一方で、人間関係をつくったり、居場所をつくったりというのがあります。その上で対象者という切り口があって、その中に学習の形態、これは短期であったり、連続であったりというような分かれ方があり、さらに我々が考えるライフステージという考えが盛り込まれます。全てが切り分けられるわけではないとは思いますが、その整理の仕方でいきますと、このリストを見て、我々はどの部分を知らないのかと考えた場合、やはり内田委員がおっしゃった、例えば12ペー

ジですか、「学習の成果を活かせるサポートの充実」に書かれている、技能を生かしながら学習するような、そういった部分が今後のヒアリングの対象として検討していくことが大切になるのではないのでしょうか。

市がやるべきなのか、都がやるべきなのか、国がやるべきなのかという観点を整理する上でも、どのような目的を持って受講者が来たのか、そしてその結果どのような知識、もしくは技能を身につけたのか、もしくはそういった知識、技能によらず関係づくり、居場所づくりというところに貢献できたのか、というようなところを見ていく。これによって、恐らく市という自治体の立場から言うと、地域に生きる力だとか環境づくり、そういったところがより重要になる。主体が都とか国であるか、市であるかということを考えてときに、住民が動くかどうかという観点が重要になります。国立市に定住する、基本的にここを基盤として生きていくなど、コミュニティづくりというような観点で考えたときには、一定程度定着することを想定するのではないのでしょうか。学習の場を提供あるいは支援する主体として市、都、国、あと民間というふうにつきり切り分けられるわけじゃないですけども、財源という観点では、一定程度の切り分けを行政のほうでやっていると思います。

話を戻して、市という立ち位置から考えると、この地域に住んでいこうとする上で、地域をよくしたい、環境を安定したものになりたいと思っている方々にとって、どのような活動が優先されるのか、それを明確にするためのヒアリングという意味では、もう少し種別広げることが問われると思います。リストに戻りますと、学習成果を発表するヒアリング、例えば先ほどあがったボランティアの方法、市でやっている「わくわく塾くにたち」などはかなりノウハウ的な要素を持っているというふうに理解しました。そういったところは受講者の反応からも、学びが多いというような感想が得られていますので、ヒアリングの対象として候補になると思います。

生島議長 すみません、わくわく塾について、何ページですか。

松塚委員 10ページです。

生島議長 ごめんなさい、このわくわく塾については、要するに出前講座ですよ。だから、市民がというか、こういうことを学びたいんだけども、行政の担当者、来てくださって言って呼んでやるという。

ありがとうございます。

ここでの議論は、国でもなく、都でもなく、市の議論なので、今、まさにお話しいただいた、地域で暮らしていく、または市民として地域の中でいかに暮らしをよくしていくか、またはこの地域の中でいかに関係をつくっていくか、そういったことについて学びをしていく、その環境がいかにつくられていくかというような視点で考えていければよろしいのかなというふうには思います。

そういった中で、専門性を、専門性ってどういう専門性かは別にしながら、でも、要するに学んだことをもっと広く、自分だけじゃなくて地域の中で還元していくとか、または地域の中で発揮していくことによってさらに自分の活動を広げていこうとするような、そういう学びということについても視点を向けていけばいいんじゃないかというようなところで、特に学習成果を活かせる場として書かれている事業には目を向けられるのではないかと思います。

松塚委員 誤解のないように言うのであれば、狭義に、狭く地域に限定するというような意識ではありません。例えば国立が主催している講座を国分寺の方々が受講できたりという、これはすばらしいことだと思います。さきほどあった、都

がやっていることであれば市はやらなくてよいのではという観点にもし立つのであれば、ということでお話ししました。

先ほどの成人の参加者が少ないというのも、明示的な結果として表れていると思うんですね。成人の方は動きますよね。それから、成人の方の例えば職業的な関心や経済的な力を身につけるための講座などは、恐らく都や国の支援で行なったり、あとは民間が主催しているんだけど受講に助成がおりたり、そういった形態で受ける方々、そういった特典を生かす方々が多い。

地域に根差した活動で成人がなぜ少ないのかということ、結果的に少ないのか、講座の設計からして少なくなったのか、そのあたりがこれまでの情報から知ることができない状況にあります。

生島議長 ちょっと定住ということと、技術を持つということで学習、専門的な技術とか知識ということを獲得しようとする成人を対象にした講座が少ないというのと、定住していくかどうかということの議論は切り離して考えたほうがいいのかなどというふうには思ったんですけど。

松塚委員 定住という言葉、よくなかったかもしれません。動くという。

生島議長 動くという。でも……。

松塚委員 動かない人、動く人って切り分けられるわけではないのですが。

生島議長 そこはちょっと、じゃあ、いるかどうか分からないから社会教育の対象にならないかということそうでもないですから。

松塚委員 そういうことではないです。

生島議長 ただ、今お話があった、例えば資格、先ほどのお話にあった資格を取るか、それを仕事に生かしていくということが、市として提供していくことになるかどうかといったときには、ちょっとやっぱりそこを主目的としていくところとはちょっと違うかもしれないということかなというふうには思います。

松塚委員 私はそうは思っていないけれども、結果的にそうなっているんですかという問いでもあります。

生島議長 事務局のほう、いかがでしょうか。

事務局 ちょっとすみません、回答、質問と回答がずれてしまうかもしれないんですけども、ここで生涯学習振興・推進計画進捗状況ということではいろんな事業が挙がっているんですけども、純粹にはその方の学びの場のためにこれがやられているもの、事業をやっているものというのは、多分、少なくなくて、例えば先ほどお話が出ましたくにたち緑のサポーター養成塾なんかは、知識を得ていただいた上で市内の緑の見守り隊になっていただいたりですとか、花と緑のまちづくり事業等で活躍できるようにということで、そういった目的の中で講座を開催して、結果として市内の緑を守るために活躍してもらいたい。あと、図書館ボランティアなんかも、ボランティアとして育成して、図書館の維持管理のために活躍してもらいたいですとか、平和の伝承者の関係ですと、平和のとこ、事業の推進のために活躍してもらいたいという、そういったそれぞれの部署

で所掌している業務を推進するために学びの場を確保しているというものになりますので。

となってくると、ちょっとすみません、結論じみたことは言えないんですけども、そういったものの集まりですので、集まりというか、そういったそれぞれの部署の目的のためにやっている講座というものが多いので、その辺は踏まえた中で御議論というか、意識していただけるとありがたいなというふうには思います。

すみません、ちょっと質問、回答ずれちゃっているかもしれないですけど。

生島議長 ありがとうございます。

堀委員。

堀委員 今、事務局が話されたのは的確なことだと思う。

中間評価の表を見て、私たちが、こういうテーマの事業を市がやっている注目したものには、緑の問題とか、図書館のサポーターとか、あと平和の関連もそうかな。市の施設や行う事業を盛り立てるため、あるいは国立市の地域環境を守っていくため、市民サポーターや協力者を養成する側面が結構あるというのはそうだと思う。私たちが、こんな講座を市はしていると評価することはできるが、市の都合や意思もあって募集している講座だということでしょう。

議論の中で、リスクリングや職業訓練になると、所掌は市ではないだろうとか重すぎるということが出てきました。なるほどそれはそうだと思う。だから、市は市なりのやり方や、ふさわしい範囲はあると思います。

また、平和問題の事業の話題が出て、知識、技術と言うだけでは足りないと感じました。戦争体験の継承なども考えると、社会倫理とか、社会人としての心構えみたいなことがあります。知識、技術、それに言い方は未成熟かもしれませんが、社会倫理のようなことも、市なりのやり方で提供できた方がいいことはあるのではないかな。

冒頭で生島議長が整理された、これまでのヒアリングの分析や、そこで何が分かったかの説明は正確だと思う。その上で、これだけでは足りないかな、補強して何をしたらいいかを議論したらいい。

生島議長 何か具体的に、じゃあ、こういうふうな視点をというところで何かございますか。

堀委員 繰り返しになりますが、具体的な知識、技術、考え方などをテーマにして、それを学ぶ講座の受講者を取材する。

それから、まだヒアリングしてない人生のステージは何かという視点から考える。シルバー世代と子育て世代は取材した。子育てと言っても、かなり小さい子を育てている時期。これから幾つヒアリングできるか分からないが、例えば人生のステージで言うと、まず成人以前はやっていない。またシルバー以前で、小さい子を育てている時期ではない成人はやっていない。

より仕事に集中している成人世代のヒアリングは可能か。あるいは子育てとは違う成人の側面はどうか。また、学習機会が充実してないと自覚している世代で言うと、40代、50代が非常にそうらしい。そのへんを塊で見られる調べ方ってあるのだろうか。世代の問題で見ると、そういうことかなという感じがします。それを全部やろうというのではなくて、典型的にはどのへんをやったらいいのだろうか、あるいは、何かいい方法はないだろうか。

追加して違うことをやることを考えないと、根拠のある提言にならない感じがします。

生島議長 ありがとうございます。
荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 図書館の事業でくにたちお話の会という、図書館側からしたら、子供にお話をしてあげるような大人の話し手を養成ということだと思っただけですが、その方たちが、図書館の事業としてなんです、「大人のためのお話会」というのをやっていて、それはボランティアで子供たちのところに行くんじゃなくて、自分たちのためにというか、同じ大人の世代の人のためにお話を語る会をやっています。すごい盛況で、予約の電話をしても満員で断られることもあります。何でこんなにも思ったら、ボランティア養成というか、技術を習得するためには、初め、ある程度の連続講座があるみたいなんです、その後、自分たちで自主グループというものがその中ではできていき、その中で研さんを積んで、図書館が主催してくれるお話会に自分たちは出演する。こんな世界があるんだって、何か結構引きつけられてこのところ通っていたんです。

それは、子供にボランティアをしましよというよりは、自分が語れるようになりたいとか、もっと研さんを積んで、それもすごい時間がかかるし、ちょっとずつちょっとずつ覚える。そういう自分の充実、個の充実するためにやっているみたいなのが、皆さん、とても生き生きしていて羨ましいなという感じなんです。そういうことって、市ができることなんじゃないかなと思います。図書館のことに引きつけて言うと、自分が抱えている課題をどうしても調べたい、調べていきたいんだけど、たった一人ではなかなかできなくて、そこで調べるための支援とか、そういうのが図書館とか公民館とかにはあって、そういうところと相談しながらやって調べ物をしていく。図書館には、前に、「くにたち調べ」というグループがあったんですけど、初めは連続講座でちょっとやってもらって、こういう調べ方をとかがあって、その後、自分でどんどん深く調べていって、それで成果を発表できるとかということがあると、それは自分のライフステージに応じた課題の充実になるのでは。

だから、子供たちにも、多分、あると思うんです。それは学校でやっているのかなとは思いますが、夏休みだったら図書館でそういう支援をしているとかいうのがあって、それが成人、それからシニアとかにもみんなあると、それぞれが充実していくんじゃないかなとか思ったりするんです。スポーツよく分からないですけど、スポーツのほうにもそういうのはあるのかなというふうに。

生島議長 ありがとうございます。

今のお話というのは、これまでの話がどちらかというと講座を中心だったけれども、そうではない、例えばボランティアとかに関わっているとか、図書館がダイレクトにいかにか生涯学習支援をしているのかというようなお話だったので、またちょっと講座からではない視点という意味でとてもいい、大事なポイントかなというふうに思いました。

堀委員 図書館協議会の委員をしています。

荒井委員が言われたことを少し広げて言うと、市の事業の中間評価では見えてこない、市が行う事業や講座が入り口になり、そこから生まれた自主グループが市のいろんな分野を支えている場面があるということでしょう。それはスポーツの分野などにもあるだろうと思う。

図書館では、図書館でのお話会をしてくれるボランティアを養成する講座を開く。終了後は、図書館のイベントを頼みたいと期待する。しかし同時に自主活動も始まって、そこでは図書館が主催していない大人のためのお話会も生ま

れていく。そういうことは、市の福祉系の事業でも、スポーツ関係でもあるのではないか。市の事業の人材養成が自主活動の養成にもなっている。大事な視点だと思う。

すぐにヒアリングができるか分からないが、市が主催し管轄して見えている世界だけではなく、市民が行う自主活動が、市民の社会教育、生涯学習の提供を広げていることがある、そういう視点かな。だから市が直接やっていることが全てではない。

委員になり諮問文を読んで、私は最初に思ったことですが、市は生涯教育の提供者とすべて考えるより、どちらかという市民が学ぶための情報提供や市民が自主的にいろんな活動を始めきっかけを養成するような立ち位置と自覚したほうがいいのではないか。初めに求められた見解にもそう書きました。荒井委員がおっしゃってくれて、思い出しました。

生島議長 ちょっと規模は小さいかもしれないですけど、講座とか、そういう自分たちの学びを生かしながら、それがより自主サークルになっていく。これはまさに子育て短歌がそういうプロセスだったわけですね。ただ、今お話あったみたいに、それがよりサークルというふうな中で、閉じるだけじゃなくて、もう少し地域活動であるとか、そういう広がりを持っている部分という。ただ、それらも恐らく図書館を場として使ったりだとか、市の事業をステージとして使ったりしていると思うので、ある程度把握はされているというところもあろうかと思えますので、ただ、そういったところ、視点というのも見えてくるんじゃないかということかなと思えます。

少しいろいろ今日も議論が出てきたんですけども、実際問題、観点は出てきたかなと思えます。例えば、この後、どういうふうに進めるかというふうなことで考えたときに、大森委員、議長からは若者の視点というのが、若者を対象にしていく、若者のライフステージという部分というのが欠けているのではないかということであるとか、ほかに足りないステージってどこだろうといったときに、先ほど堀委員からもあったような子育て以外の世代、高齢者以外の世代という、そういうあたりというの、部分というのを見ていく。ライフステージということ考えるならば、そういう少し分かりやすいステージというのを切り口にして選んでいったらいいんじゃないかというようなことがあったかと思えます。

それとともに、内容として、例えば専門的な知識、技術、今、その中に入るのは、例えば、今、荒井委員があったように読み聞かせというようなことであったりだとか、または平和であるとか、考え方、思想とか、またはさっきお話があった現代的課題というか、現代的な捉え方で、例えば性教育をどう捉える、そういうような観点をテーマにした事業の中で、様々な世代がどう対話をしたりだとか、または継承していったりだとかしていくという、そういう観点の講座というのが、または事業が入ってくるといいんじゃないかという。

さらには、形式として、世代、やっぱり地域の中で学んでいくっていったとき、地域の中での学びということを見ると、やっぱり目的はどういうふうに住生活基盤、暮らしをよくしていくかという学びにつながってくるんじゃないかと。なので、仲間づくりというような、長期期間、連続講座に入っていくけれども、でも、その連続講座に入っていく手前に単発講座がある。そういうふうにつながっていくような講座というのが対象になったら、この問いというのがかみ砕しやすんじゃないかというような、そういった視点が今日は出てきているかなというふうに思います。

ちょっとこういったことを、全部を答えてくれるようなことを対象にしていると、この会議、何回やってもヒアリングの時間が足りないので、そこも複層

的に答えてくれるような事業というのを、少し事務局とか、または事務局が持っている情報の中でセレクトしながら、ここの対象にはこの観点とこの観点が入れられそうだとか、そういうちょっと重ね合わせることをしながら、二、三ぐらい追加でヒアリングができると少し埋まっていくかなというふうには思いましたが、どうでしょう、そんな。

内田委員 多分、その方向でやっていくと、公民館とか、今回、ヒアリングで取ったような内容の講座を充実させたいとか、そういったようなことが、多分、最終的な考え方として出てくるような気がするんですね。

一方で、事務局に確認したいのですが、例えば今回の11ページにあるようなLINKくにたちのところをちょっと見ていただきたいんですけども、LINKくにたちには1,000人の参加者が来て、しかもこれ、マラソンだから申し込みするので、多分、年齢が何かもう既に登録されていて、多分、1,000人の年齢構成だとかもはっきり調べれば出てくると思うんですね。この真ん中のLINKくにたちの利用者の声みたいところは、昨年度に引き続き開催を喜ぶ声が参加者や来場者の双方から多く寄せられたってあって、非常に好評な、しかも1,000人も集まっているわけです。こういったようなイベントを充実させるというのは、この答申の答えになり得るのかどうか。

今のところの話は、やっぱり何とか講座、何とか講座とかというのが多くて、多分、恐らくそこに参加しているのは、これ、勝手な予想ですけども、高齢者の方だとか、あるいは仕事を持ってなくて子育て中の方だとか、割と日中に時間が持てそうな人が参加するようところは充実していくんですけども、この答申の理由のところ、仕事や家事で忙しくて時間が取れないとかっていう人もいて、そういった方が、先ほど松塚委員がおっしゃったような、移動するような、日中、移動するような世代の人は、多分、そういった講座にはやっぱり参加できないと思うんです。

でも、一方で、こういったLINKくにたちのようなイベントを充実させるような考え方を持っていったとすると、幅広い世代、多分、それは参加者の記録を見れば年齢層だあってきつと出てくると思うんで、そういった30、40、50ぐらいの、日中移動して国立にはいないけれども、でも、休日にはいて、そういった参加することでスポーツに対して親しみを持ってもらい、または連帯感や達成感を共有して市民同士のつながりをつかめるような、そういったことがこの生涯学習の充実につながるのであれば、多分、ターゲットとする世代もはっきりすると考えます。

それから、そういった内容が答申の内容になるのであれば、同じような内容のもの、スポーツイベントだったり、文化芸術のイベントだったりとかというようなところを増やしていくということが一つの答えにつながると思います。もちろんさっき言った仲間づくりだとか、そういったところも充実するし、一方でそういった休日とかのイベントとかも間口を広げるとか、種類を広げるとかして充実するとかというふうに答えを出していくのであれば、多分、ちょっと答申の方向性も見えてくるような気がするんです。

事務局 すみません、個人的な意見になってしまうので、そこは逆に言うと、すみません、皆さんの総意としてそれがふさわしいかというのは御議論いただくことかなと思います。個人的に思う部分はありますけど、今は申し上げませんが、ということをおっしゃって御議論いただくことかなというふうには思っております。それが答申としてふさわしいのか否かというところ、イベント色が強いというふうには言っちゃってもいいかなと思うんですけども、ものをここで充実させることがふさわしいのかどうか、御議論いただくことかなと、すみま

せん、繰り返しになってしまいますけど。

生島議長 大森委員。

大森委員 大森です。

今、内田委員が提起された内容はきっと大事なことだと思うんですね。社会教育について、国立は本当に歴史の重みがありますから、その中で繰り返されてきた、これこそ社会教育だというような、これこそ生涯学習だというようなものについての議論がどうしても中心になりますよね。内田委員が出された意見、もう少しそこを幅広めに、イベントみたいなものも入れて考えていこうということで、僕はあるべき議論だなというふうに思うんですけど、議論の順番としては、答申の回答になっている概念が、ライフステージについて応じた学習の機会の例になっていて、これもこの中の議論の中でそのことについての理解が深まればいいと思っているんですけども、やっぱり含意としては、例えば子育て世代だったり、シルバー世代であったり、オーソドックスな議論で言うとステージごとに様々な課題があって、それをどうやって対応していくかという学習がこれまでは考えられていたんですけども、あえてこういう言い方をすると、切実な課題に対応したような学習というものが含意としてあると。

そうした課題にやっていくためにも、楽しむこととか、多くの人が集まるとか、そこに入れなかった人が入るということで、そういう意味でも内田委員の提起は大切なんですけれども、まずはライフステージに応じた学習機会を達成しているところについてあと少しヒアリングを行って、そこでできた知見を得て新しいところにチャレンジしていくという順番がちょっといいのかなという気がいたしましたがいかがでしょう。

内田委員 それはそれで一つの御意見だと思いますし、今、皆さんがそういう方向で充実、話し合いを進めていこうというふうに進むのであればそのとおりだなというふうに思います。なかなか、例えばそういうスポーツイベントとか音楽イベントみたいなのは、生活を豊かにするとか、心が豊かになったりとかということには通じるとは思うんですけども、広い意味では学習にはなると思うんですよね。学習かどうかという、学習になるのかどうかというのは非常に難しいところなんです。ただ、なかなか参加しにくい世代をターゲットにしようとしたときに、学習を前面に出しちゃうと、その人たちは出てくるのか、そこに参加するのかというふうに考えると、多分、今までも参加しなかったように、そういう形だと参加しにくいとか、参加する興味が持ちにくいとか、そういうのが出てくるんじゃないのかなって気がとてもするんですね。

ですから、つまりこれが学習かどうかというのは本当に議論はあると思います。最初のころに学習のことについて何回かお話があって、その場で学ぶこと自体も学習だけれども、そこに参加したりだとか、そういった機会に触れることで学ぶだとか、そういう学ぶというのはいろんな意味があるよねというのが割と最初のうちの議論の中ではあったと記憶しています。そういった意味では、広い意味で捉えて、スポーツイベントなんかも学習というふうに捉えれば、そこを充実すると考えます。

生島議長 堀委員。

堀委員 今、大森委員が言われたことは、どこをヒアリングしてもその後の評価のところに出てきますよね。

今日の最初にあったのは、あと最大二つ、三つヒアリングするとしたらどこ

だろうということでした。少し違うところをヒアリングしてみましよう。内田委員の提案した事業を調べても、その後の評価のところではいいのではないですか。また別ですよ。

社会教育委員の会議の答申は、諮問に答えて2年に一度は出されるわけですが、総花的でなく具体的にここは強調したいことを一部でも出せばいい。ライフステージに応じて、いろいろな枠組みは書いてあるが、せめてここだけは、今の国立市が提供する生涯教育を補強するような内容を出していきたいという気持ちが肝要というか。

会議は記録されて公開されるが、諮問した側ではどのへんを強化したいと思っているとか、このへんは答申提案のストライクゾーンに入るのかということ、私も聞きたい。委員側で考えていいことなのだろうが、諮問文に書かれた実際的な意図が分からない。

生島議長 ありがとうございます。

内田委員がおっしゃっていた、特に、要するに働き盛り世代に対してが、連続講座とか、やっぱりそういう昼間行っている講座というのにやっぱり出るというのは難しいけれども、でも、すごく間口の広いイベント的なものであったりだとか、それが例えばスポーツとか芸術、ここを享受するというのも本当に大事な学びだと思います、学習活動。そういうことを一緒にみんなで汗を流していくということも、さっきのボッチャの話もありましたけども。なので、そういったやっぱり学びというのがいかに保障されていくか、どういうふうに設けられていくことが必要か、働き盛り世代の学習機会というのをどういうふうに考えていくかということ、やっぱり大事なところかなと思います。

ただ、そのときに、いきなりその対象を事業にするか、もしくは様々な、ちょっと大森委員、先ほどありましたけれども、もう少し後に議論をしてみたらということとともに、別のところで対象、その観点も含みながらヒアリングしてみるとかというように含めて、こういう世代にはどうアプローチしているのか、いや、できないとなるとどうなのか、どういうものが必要かというふうな議論もなり得てくるかなというふうに思いますので、ちょっと私も内田委員からの観点というのはとても大事だと思いますので、皆さん、ぜひちょっと忘れないようにしながら、この後のヒアリングとか、または議論というのにしていければいいのかなというふうに思いました。

文化、体育などのスポーツという、皆で同じものを享受しながら色々感動したりだとか汗を流したりする、これも大事な学習活動ですし、そこに入りやすい大型のイベント事業とかということがどういうライフステージに対してインパクトがあるかという視点というのはやっぱり大事なことかなというふうには思って、ちょっとずっと考えていきたい、残していきたい視点かなというふうに思いました。

その辺りも含めながら、この後、ちょっと具体的に二、三ぐらいの事業なり、さっき図書館のことも、単なる講座とかというだけではない、施設の支援というようにところもありましたので、どこをどうやってちょっと切っていけばいい、それぞれの観点が入るかということについては、ちょっと聞き取って検討させていただきながら、次回、具体的な御提案を。

寺澤委員、お願いいたします。

寺澤委員 寺澤です。

まとめかけたところ、何回も申し訳ないんですけど、内田委員が今おっしゃっていた内容、すごく大事なことだなと私も思うんですけど、そのときに学習と成果発表の場というのがあるかなと思っていて、イベントはどちらかとい

うと、成果発表の場になっているような気がしているんです。例えば、年に一回のマラソン大会に自分が出る、走り切れるように練習をしようって、それが
ある意味、その方々のモチベーションであり、生涯学習なのかな。

それはもちろんスポーツだけじゃなくて、文化としても、この展覧会にこの
作品を出したい、毎年ここで出すために40代、50代で忙しくても、日々練
習ができるとか継続して取り組むとか。だから、忙しい世代にとっては、毎回
決まった時間にここへ行って何かをするというのはできないけれど、でも、成
果の発表はできるように自分で時間をつくって何かコツコツやっていきたい
という思いを持てるような何かできるものをできたら、そのイベントというの
を学習の場と考えるか、成果発表の場と考えるか、そこも割と大事な視点かな
と思ったりしました。

成果発表の場ということだと、例えばボランティア養成講座を実施した
後、ボランティアをどこか実際にできる場というのがなければ、本当に講座を
受けただけで終わりになってしまう。そうすると、なかなかその先続いていか
ない、なかなか長続きはしなかったりとかすると思います。読み聞かせでも、
実際に読み聞かせがあるからこそ、その講座が成り立つと思います。そういう
視点もちょっと考えながら今後検討していけたらと思いました。

堀委員 あと二つ、三つヒアリングか調査をすることで言えば、LINKくにたちの
行事は、その一つにはなるのではないかと私は思いました。それをどう評価す
るかということも含めてね。

寺澤さんが言われた、大勢の市民の成果発表の場かどうかということも、調
査の上で議論できることでもあるでしょう。答申を考える中で、こういうもの
をどう評価するかも話せるのではないか。座学の講座、連続講座ばかりではな
い検討の広がりも持てる。LINKくにたちなら、体験者のヒアリングだけで
なく、行政側への調査もあるでしょう。幾つかやるならその一つにはなるし、
その後の議論につなげていけると思う。

生島議長 ちょっと今までもあったんですけど、ここに書かれていることと本当の実
態がどうかということのちょっと分からないところもあるので、今いただいた御
意見とかも大事なんですけども、ちょっとその辺、すり合わせというのは、
少し事務局のほうで下調べというか、実態をつかんだ上でのほうが、時間も限
られているので、いいかなというふうに思いました。なので、今いただいた御
意見というのは大切にしながら、検討をちょっと引き取らせていただければと
思います。

そういう意味では、次回、提案をさせていただければというふうに、これは
いい、駄目というんじゃないで、本当にこれを聞いたところで私たちが求める
答えにつながるかどうかとか、あとはそういうお話ししてくださる方がどうい
う人がいいかということも含めて考えていきたいと思えます。そしてまた、こ
ういうところに決まったということであれば、報告が上がってきたということ
であれば、ここにはどういうふうに聞いてみようというのをまた皆さんで議論
していくと、今みたいないろいろな視点というのができるかなと思って、それ
を反映しながらヒアリングなりできるかなというふうに思えますので、ちょっ
とそこら辺で少し下調べをさせていただければというふうに思えます。

ただ、今、お話があったみたいに、どういう調査、どこに調査するかという
こととともに、そういう中で我々がどういうものを見てくるか、どういう視点
での期待されるポイントとして考えるかということ、今日、かなり議論が出
てきましたけど、そういったものが、ある意味、確認されていたりだとか、
またはそこには見えてなかった新たな視点というのがヒアリングなどで出て

くると、さらにここに肉づけしていけることになるかなというふうに思いますので、その辺をぜひ、今後、引き続き御協力いただければと思います。

よろしいでしょうか。ありがとうございました。よろしいでしょうか。

では、今日の次第2の答申については以上にしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

そうしましたら、次第3、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局です。2月17日火曜日に東京都市町村社会教育委員連絡協議会が行われました。委員の皆様への連絡事項といたしまして、4月18日の土曜日、宮地楽器ホールにて定期総会が行われます。こちらの出欠につきましては、正式に通知文が届いた際にお尋ねしますので、また御回答のほうお願いいたします。

続きまして、次回の定例会についてです。第11回目となります定例会は、3月25日水曜日午後7時からです。場所はこちらのF S Xアリーナ第1・第2会議室で行いますので、よろしくお願いいたします。

また、次年度の定例会についてですが、皆様から回答をいただいた結果、今年度と同様、第4週水曜日を予定しております。多少、週のほうは前後する月もある可能性がございますので、次回の定例会で正式な日程表をお出しします。まず、4月の定例会の日程のみ先にお伝えさせていただきますと、4月22日の水曜日になります。

よろしくお願いいたします。以上です。

生島議長 ありがとうございます。

4月の22日ですね。3月の25日の後は4月の22日というふうになりますので、よろしくお願いいたします。基本的には第4水曜日で検討をしていきたい。ちょっと祝日があつたりしますので、ちょっとそういう調整も詳しくまとめて一覧でお出していただければと思います。それまでに何か不都合がありましたら御連絡いただければと思います。

ほかはよろしいですか。

ありがとうございました。

その他、何か質問等はございますでしょうか。

なければ、本日、予定しておりました案件は全て終わりました。次回は3月25日水曜日午後7時から、こちらのF S Xアリーナの第1・第2会議室になります。皆さん、お疲れさまでございました。

— 了 —